



# 日口交流

発行：特定非営利活動法人 日口交流協会

E-mail:nichiro@nichiro.org

Home Page <http://www.nichiro.org>

〒106-0041 東京都港区麻布台3-4-14 麻布台マンション401号

Tel: 03 (5563) 0626 Fax: 03 (5563) 0752



## ロシアにおける日本年・日本におけるロシア年「新春日口交流のつどい 2018」開催

服部 文男

1月31日、在日ロシア連邦大使館において「新春日口交流のつどい2018」が開催された。当協会にとってはロシア大使館で新年会を開催できるのは5年ぶりとなる。以前当協会が開催した新年会とは異なり、今回は、当協会、日本・ロシア協会、日本対外文化協会、ユーラシア21研究所の4団体が主催となり、後援に在日ロシア連邦大使館となっている。

今年は2016年12月プーチン大統領訪日の際の政府間覚書により開催の「ロシアにおける日本年・日本におけるロシア年」にあたり、両国がこれまで以上に交流等を深める企画が進められ、その一環として「新春日口交流のつどい2018」が開催できた。参加者は4団体協力のもとに約250名のロシア関連団体の会員やご家族、友人等の皆様まで多くのご参加を頂いた。

開催は、午後4時30分から第1部としてロシア大使館付属学校講堂にて、今から約200年前、回船の船頭でロシアに漂流した大黒屋光太夫の話をオペラにした「КОДАЮ」のDVDが上映され、正に日口の交流の原点であると深く感銘した。講堂入口には当協会笠原会員の指導によりロシアの皆さんのが描いた友禅絵が展示されていた。次にロシア大使館大広間に移動し、来日中のロシア女子合唱団「アルエイ・パルサー」の公演。ロシア民謡のともしび、カチューシャなど、日本の歌は浜辺の歌、故郷など総勢41人の美しい合唱に心にしみる感動を得た。

引き続き第2部に入り、「新春日口交流のつどい2018」のパーティーが開宴された。司



会は日口協会黛常任理事、当協会岩本常任理事が担当し、開会挨拶は実行委員会会長の土屋日口協会副会長が行った。日本とロシアの国歌齊唱が行われ、ロシア国歌はロシア女子合唱団、日本国歌は新藤昌子氏の独唱。

主催団体挨拶には、高村正彦日本・ロシア協会会長、有



馬朗人日口交流協会会長。続いて今回の開催に大変なご協力をいただいたドミトリー・ビリチエフスキー臨時代理大使からお祝いのお言葉をいただいた。来賓代表の挨拶は、西村内閣官房副長官から、その後乾杯を吹浦ユーラシア21研究所理事長の音頭により祝宴に入った。

テーブルにはピロシキなど多種のロシア料理、飲み物はロシアの酒ウオッカ、ワインなどが並べられこれらを味わいながらロシア等についての歓談で会場は相当の盛り上がりとなった。また、大広間前においては、当協会山岸常任理事が指導しているロシアの皆さんのがけな展をご観賞いただいた。午後7時30分閉会の挨拶を服部日口交流協会副会長が述べ、無事お開き

となった。

今回の開催にあたり在日ロシア連邦大使館ドミトリー・ビリチエフスキー臨時代理大使、ユーリ・サーブリン参事官の多大なるご協力に厚くお礼申し上げます。また、実行委員会事務局担当の日本・ロシア協会、連携ご協力いただいた皆様並びに当協会準備委員会メンバー等の皆様のご協力に対し合わせてお礼申し上げます。(副会長)



### お知らせ

#### ●第47回 懇話会

講演会『日本とロシアにおける学校教育の現状と課題』

講師 グリゴリー・ミソチコ氏（日本語講演）

少年期の4年間日本の小学校で学校教育を受けその後モスクワ国立大、筑波大大学院（博士課程修了）で教育学等を研究。現在筑波大人文社会系研究員。4月からモスクワ市立教育大学で教鞭をとる予定。

日時：3月10日（土）1:30～3:30（開場1:00）

講演後講師とのフリートークタイムあり。

会場：東京外国語大学 本郷サテライト4階

文京区本郷2-14-10 TEL5805-3254（土）080-4325-9981

地下鉄本郷3丁目駅徒歩5分、JR御茶ノ水駅徒歩15分

会費：会員2,500円 一般3,000円 会員学生1,200円

一般学生1,500円 外国人学生1,200円

満員になり次第締め切りとさせていただきますので、お早めにお申し込みください。

#### ●第49回マトリョーシカ絵付け教室

日時：2018年2月11日（日）13:00～16:00

講師：菅野エレーナ

場所：田町駅みなとパーク芝浦、「リーブラ」造形表現室

会費：3,000円（5個セットの教材、講師代、お茶代含む）

\*2回目以降の参加で教材をお持ちの方は2,000円です。

\*第50回マトリョーシカ絵付け教室は3月11日（日）です。

お問い合わせ、お申し込みは協会事務局まで

Tel: 03-5563-0626 nichiro@nichiro.org

#### ●ロシア語クラス生徒募集中

入門クラス開講！（月）13:30～14:30

少人数制ロシア語検定クラス募集！（日時相談）

平日クラス月4回￥5500×3ヶ月前納。見学できます。

入門クラスII（水）18:30～19:30

初級会話1（月）19:30～21:00、初級会話2（月）17:30～18:30

準中級会話（月）18:30～19:30、中級会話（火）18:30～20:00

● 広報部宛、ご投稿、ご意見をお待ちしております



テーマ別ロシア語教室に参加して

松本 泰男

昨年（2017年）から新しく始まった「テーマ別ロシア語教室」に参加しています。ここ数年、毎週月曜日夕方のロシア語教室に参加してきました。ナターリア先生のお陰でようやく基礎レベルの文法が分かり始めた頃だと思いますが、日常の些細な場面で実際にどの様なロシア語が話されているのか、中々想像が付かないものです。日本に入ってくる外国の映画やTVドラマの大半が英語なのですから、ロシア語に触ることはまず有りません。意外と易しいかも知れないし、日本語や英語とは全然違う形の表現の様な気もするし。ロシア語教室に少しバリエーションが欲しいと思っていた所でした。

2020年の東京オリンピック・パラリンピックに向けて来日するロシア人の数はこれから益々増えていくでしょう。外国で病気になったり怪我をしたら誰でも心細いものです。その様なときに少しでも助けてあげられれば!と言うことで、「テーマ別ロシア語教室」第一回目「病院で」が5月7日に開かれました。スニトコ先生の充実した資料はとても3時間でこなせるものではありませんが、貴重な参考資料が手元に残りました。

ロシアでは我々の想像以上の日本ブームですが、「折り紙」もその最たるもの一つです。ロシアの人達に折り紙を教えて上げられれば素晴らしいことです。7月16日の「折り紙」はその様な時にきっと役立ちます。スニトコ先生はとても器用な方で、(内緒かも知れませんが?) 折り紙を教えるのはこれが初めてとのことでしたが、「折る」とか「折ったものを広げる」などの表現は覚えておくときっと役に立ちます。

逆に私達がロシアに行った時に役立つ「交通機関」。10月29日のナターリア先生の講座はロシアの交通機関や駅の風景の

### ウズベキスタン便り 7

寺尾 千之

何かと話題を呼んだ今年の成人式でしたが、子育てに一区切りをつけられた親御さん達にとりましては、祝福と同時に安堵の気持ちに浸った特別な1日ではなかつたでしょうか。来年が NORIKO 学級の成人式、創立20周年に当たります。創設者・大崎重勝さんが他界された 2005 年、学級は 6 歳、小学 1 年生でした。学級を現在の 19 歳にまで成長させた原動力は、他ならぬ、当時の生徒達の「日本語を勉強して日本へ行く！」という搖ぎない決意でした。地元リシンタンの人々の、子ども達を見守る温かい眼差しと豊かなホスピタリティが、多くの日本人ボランティアと結合して化学反応を起こし、現在に至つたのです。

そもそも、故・大崎重勝さんは、旧ソ連から独立間もないウズベキスタンで、家の手伝いと学校に明け暮れるだけの子ども達を目の当たりに、「子ども達の安らぎの場」になればと、縁あったリシタンに学級を設立したのでした。当時の状況から子ども達の将来をうかがい知ることは難しく、学級卒業後は、彼らが独自に進路を切り開いて行ってほしいと願うのみでした。ところが、どうでしょう。今、大崎さんの教え子達の大半が、来日して仕事や学業に勤しんでいます。30歳前後になった彼らの中には、伴侶や子供達と一緒に日本に暮らす人

写真をふんだんに使った楽しいもので、先生もいつもよりリラックスされていたように思います。

12月9日の「買い物」もロシアでショッピングを楽しむときに役立ちます。この日の先生、ユリア・ストノーギナ先生はロシア国内のラジオ番組でパーソナリティーを努め、現在は日本で日露関係のスペシャリストとして活躍されている方です。著書も多く、先生ご自身が平明なロシア語に書き直したドストエフスキイの「カラマーゾフの兄弟」や「罪と罰」をご紹介頂きました。ユリアさん自ら朗読されたCD付きです。

日口交流協会の豊富な人脈を駆使して様々な先生の講義を聴けるのもこの催しの素晴らしいところです。この様な機会を設けて頂いた交流協会の千葉様をはじめ皆様に感謝しています。「寺と神社」、「祭り」、「茶道」、「華道」等など日本的なものを紹介するためにカバーして頂きたいテーマは限りが有りません。一方で、これまでのテーマも1つひとつ内容が豊富で、一回限りでは消化不良のままです。各々第2回目・3回目が有っても良いと思います。そして、もっと多くの方々にこの教室を楽しんで頂きたいと思います。

余談になりますが、アガサ・クリスティーの「エルキュール・ポアロ」シリーズでしばしば英語のHとロシア語のHの違いが問題解決の手掛かりとなっていることは皆さんご存じのことだと思います。つい最近「オリエント急行殺人事件」の最新の映画を見ましたが、ここでも同じようにHが手掛かりの一つとなっています。しかしながら、英語・フランス語・ドイツ語が堪能な天下の名探偵ポワロもロシア語はからきしダメな様です。ご存じでしたか？この点、我々の方がズーッと上なのです。皆さん！少しずつでも頑張りましょう！

も現れています。

この間、ウズベキスタンの国そのものも順調に発展し、リシタンの街にも大きな変化がもたらされていました。2年前までは、タシケントとリシタンを往復するには、標高約2000mのケムチック峠を車で6-7時間かけて超えなければなりませんでした。日本人ボランティアにとっては、成田空港から9時間かけてやっとタシケント国際空港に到着した直後に、ダメ押しのように、新たな強行軍が待ち受けていたのです。冬から春先にかけての雪の影響も、ガニシェル校長にとっては心配の種でした。「峠が通行止めになつたら3月の弁論大会に参加できない」と彼から恒例のようにメールが届いたものです。現在では、タシケントからリシタンの隣町・コカンドまで電車が開通し、4時間程度で到着できるようになり、ガニシェル校長もホッと胸をなでおろしていることでしょう。

では、20年後のNORIKO学級は、どうなっているのでしょうか？その頃70代になっているガニシェル校長は、変わらず運営手腕を発揮しているかもしれません。ご自身やご家族の健康面のケアに専念せざるを得なくなつた日本人サポートーでも、変わらず学級に心を碎いているかもしれません。一方で、心強い援軍の兆しもあります。日本で遅く生き抜く学級出身者達や、新たな企画をたて、学級との草の根交流に情熱を燃やす日本の団体や若者達の登場です。人間同様、NORIKO学級も来年の成人式からが、いよいよ本番を迎えるのかもしれませんね。

(リシタン・ジャパンセンター事務局長)

● 広報部宛、ご投稿、ご意見をお待ちしております

## 旧満州で生き別れの親子、47年の歳月を経て対面、その後(5)

沖大夫

映画「異郷」の冒頭に、マリーナ・ボリソワ（満里子）さんの母リディア・ボリソワさんが音楽技芸学校の同級生であるボーリヤ・イリインとオーレーク・ルンツトレムの二人に上海でジャズバンドを結成しようと誘われるシーンがある。それは1934年6月12日のこと。リディアさんの運命は、ここで大きな岐路に立つこととなった。彼らと共に上海へ行き、ピアニストとして生きるか、それとも違う道を辿るか。

ルンツトレムの父もリディアさんの父と同じく東清鉄道（1932年に満鉄に経営が移譲）に職を得ていたが、ソ連は1935年に満鉄の権利を完全に日本に譲り渡し、満洲から撤退してしまう。その結果、この時期、次第に住みにくくなっていくハルビンから上海租界へ移動するロシア人が増えてくるのである。

リディアさんはその時、彼らと運命を共にするまでの考えはなかった。ルンツトレムは、彼の経歴を紹介したものによれば、すでに1934年にハルビンで弟のイーゴリ含め九人でジャズ・オーケストラを結成しており、1936年に上海へ渡つて本格的に職業音楽家としての音楽活動に入るとある。イリインはその後、上海で阿片中毒になって不幸な一生を終えることになったようである。

1930年代のジャズの流行は、当時、極東にまで来ていたことが分かる。ルンツトレムはデューク・エリントンの「ディア・オールド・サウスランド」の演奏に魅せられ、ジャズへの眼を開かされたという。この時期の上海租界はアジアにおけるジャズのメッカであったとの説もある。彼らと同時期に

ハルビンから移ったロシアの音楽家には、セルゲイ・エルモラエフのジャズ・オーケストラやアレクサンドル・ベルチンスキイがいる。ベルチンスキイは1934年にニューヨークで故郷への郷愁をテーマにオーケストラを主催したが、中でも「異郷」（ベルチンスキイおよび女流詩人ライーサ・ブロフの詩）は有名であり、ルンツトレムも上海でその曲を演奏したことがあった。「異郷」が、奇しくも映画のタイトルと同じであることは偶然とは思われない。ルンツトレムはこの上海で「極東のジャズ王」の異名を取るほど名声を博すことになる。

彼は2005年に89歳で生涯を閉じたが、ロシア有数の音楽家の一人として、そしてルンツトレム・オーケストラの主宰者として今なお名を残している。しかしながら、第二次大戦終戦後、上海を後にソ連へ移住した当座は、リディアさんと同じく厳しい時期を送っている。社会主義国内でのジャズの音楽活動の前途は暗く、「ジャズは人民に不要」と判断され、オーケストラは解散させられたのである。7年の雌伏の時代を経て、1955年に活動再開の機会が訪れ、翌56年にはルンツトレム・オーケストラが正式に国の機関に組み入れられる。リディアさんはソ連に移って、しばらくは忍従の時間が続くが、その後、運よくクルガンスク・フィルハーモニーのピアニストとして採用されることになる。映画「異郷」の中でルンツトレム・オーケストラがクルガンスクを訪れる（恐らく1970年代）、彼と再会した話を娘のマリーナさんが語る場面がある。40年経過しても彼はリディアさんを覚えていたという。

## 開港都市神戸で「ロシア人」を想う

倉田 有佳

11月半ばは、サンクトペテルブルクで開催される国際文化フォーラムに出席するはずだった。5月に招待状は届いていたのだが、ロシア側担当者が途中で変わったとかでうやむやになってしまった。それでは、と開催時期が重なっていた「神戸開港・大阪開港150年記念第10回外国人居留地研究会全国大会 in 神戸2017」に急きょ参加することにした。

思えば、神戸に行く時は滝波秀子さん（貴会常任理事）がいつも横にいた。初めて桜木ゾーヤさん（1909年ハルビン—2003年神戸）のマンションを訪れ、呼び鈴を恐る恐る鳴らしたのは、神戸の震災から数年後のことだ。

ゾーヤさんも面識のないわれわれを家に上げるのに不安があったのだろう、友人のヴェーラさんを呼んでいた。ゾーヤさんのマンションで日本人にフランス語の個人レッスンを行っていたのだが、そんなヴェーラさん本人を前にして、「ロシア人はだらしがない。私の母はフランス系。ヴェーラの家は狭くて汚い。だから私の部屋を貸してあげている」と、ゾーヤさんはズバズバ言ってのけた。このヴェーラさんが、帝政ロシア時代の神戸の領事マリーニン氏の令嬢だったと知ったのは後のことだ。

数年前に最愛の夫に先立たれ、独り身となつたゾーヤさんの晩年を親身になって支えたのは、夫・桜木新吾氏の神戸外大時代の教え子だった。いつもお願いするハイヤーの運転手さ

んや街の人たちの善意も片言の日本語しか話せないゾーヤさんの日常を支えていた。

さて、今回久しぶりの神戸でぜひとも訪れたかった先は、かつて大連や上海、北米・南米航路と結ばれていた神戸港だった。亡命ロシア人を受け入れ、米国やブラジルなどの新天地へ向かわせた。われらがゾーヤさんにとって、ここは終戦後に満州で見送った夫と7年振りの再会を果たした奇跡の場所だった。

全国大会初日の夜、神戸の居留地研究会の皆さんとの懇親会で、白系ロシア人について話を振ってみた。「ロシア人？いたいた！」と、モロゾフの名前を挙げる方、神戸にロシア人が大勢いたから大学でロシア語を選んだという方。話がはずんだ。

「亡命」とか「白系」という言葉を頭に付けないのは、半世紀以上も前の出自はともかく、自分と同じ街に暮らしてきた住人（ただし外国人）、とでもいった意識からか。

今年の全国大会のテーマは、「開港都市の異文化受容」だった。ゾーヤさんたちは、こうした「開港都市」神戸の歴史的風土によって「受容」された「20世紀の異文化」だったのだ、と10数年振りの神戸で実感した。（ロシア極東連邦総合大学函館校准教授）



滝波秀子さんが写したゾーヤさん（左）と  
ヴェーラさん（1997年）



《モスクワ・アラカルト47》

## ジーマは日本で何を感じたか？

日向寺 康雄

以前こちらに何度か書かせて頂いたが、私が気楽な独り者であることから、モスクワのアパートにはいつも誰かしら居候がいる。類は友を呼ぶのか、皆ユニークな連中ばかりだ。その中で最も若いジーマ（21）が年末しばらく、父の介護をする私を手伝うため日本に来てくれた。彼はそろそろ兵役を果たさなくてはならないが、考えるところあって、軍隊に行く代わりに病院や老人ホームなどでの奉仕活動で義務を果たしたいと考えている。そんなわけで、もちろん原宿や渋谷、温泉旅行も楽しみだが…「福祉先進国」日本での介護の現状を直接見学し、それに参加するのは有益だと冷静に判断したのだ。ロシア憲法は、兵役の代替遂行を基本的に認めているが、実際上そうした例はほとんどない。ジーマも故郷タタールスタンの徴兵司令部で自身の希望を説明したが、担当者は皆「これまで扱ったことがなく分からぬ。1年や2年などすぐに立つから、面倒くさいことはやめなさい」と取り合ってくれなかつた。

実はジーマは性的マイノリティーで、その事を公にしている。彼は、オリガルヒの一人で現在ロンドンで事実上亡命生活を送るホドルコフスキイ氏が財政支援するインターネット・プロジェクトの中でカミングアウトした。

<https://www.youtube.com/watch?v=yZoUEspExNk>

しかしそれが原因で、家族から一方的に絶縁されている。ジーマは1996年、ハリコフ（ウクライナ）医科大学留学中のインド人学生とロシア女性の間に生まれたが、卒業後父は帰国してしまい音信不通となった。若い母は彼を連れ実家に帰り、その後ロシア人男性と再婚して女の子を生んだ。彼は新



しい父とうまくいかなかつた。故郷の町を出たい一心で懸命に勉強し、3年前モスクワの大学に合格、コンピュータ・アドバイザーとしてアルバイトし、それを通じて私と知り合つた。レディ・ガガと米民主党が大好き、ロシアでは反体制活動家ナヴァーリヌイ氏の活動を熱烈応援、よく「民主派」が催すフラッシュモブに参加している。米国行きを夢見てお金をため昨夏ついにビザを申請したが、トランプ政権になった事もあり許可が下りず、その浮いたお金で今回日本に来たのだった。エリツィン時代の大混乱を身を持って体験した私は、とにかく社会の治安と秩序を回復させ一定の経済的安定をもたらし、多くのロシア国民が自信を取り戻すきっかけを作ったブーチン氏の仕事ぶりは、基本的に評価されるべきだと考えている。この問題では、いつもジーマと言い争いになる。今回日本を訪れた感想を、先日彼は「日本人の働く姿とそれを支える精神文化に、強い驚きと深い感動を覚えた。自分の中に流れているアジアの血を感じた。日本で過ごした4週間を生涯忘れないだろう」と書いてきた。こうした、様々な価値観を受け入れる柔軟で寛容で積極的な心を持った若者が少しずつ増えてゆくことは、ロシアにとっても日本にとっても、そして世界にとっても嬉しいことだ。

モスクワ「ムゼイ」廻り・その9

## 戦勝博物館

Музей Победы

大矢 温

前回この欄で紹介した祖国戦争博物館は1812年の対ナポレオン戦争を記念したものだった。間違いやすいところだが、ロシアには2回の「祖国戦争」がある。無印の「祖国戦争」は19世紀の対ナポレオン戦争、「大」がついた「大祖国戦争」は20世紀の第二次世界大戦のことだ。今回の博物館は1941年から45年の第二次世界大戦、つまり「大祖国戦争」の勝利を記念した博物館だ。場所はパクロンナヤ・ガラー、「祖国戦争」のおり、ロシアに攻め込んだナポレオンがモスクワ攻略を前に頭を垂れた、という、いわく付きの場所だ。地下鉄も延伸したのでアクセスもよい。このパクロンナヤ・ガラーワ一帯の施設を総称して戦勝博物館と呼んでいる。中心となるのは大祖国戦争中央博物館。正面には1418日間続いた戦争を記念して高さ141.8mの鋼鉄製のオベリスクが立つ。

ジオラマや当時の兵器・軍装品などが展示してあってそれなりに見応えがあるのだが、なんといってもここはロシア版の「靖国神社」。戦死者の名簿などが展示してあって厳かな雰囲気が全館を支配している。2000万人という途方もない犠牲を払った戦争だ。ここでふざけたり嬌声を上げたりするのはもってのほかだ。ところがこの戦勝博物館には軍事ヲタクが欣喜雀躍して喜びそうな場所もある。博物館の裏手に広がる屋外展示場だ。第二次世界大戦で使用された戦車や大砲、飛

行機や大砲、挙げ句の果てには巨大な305mm列車砲まで展示されている。ソ連軍のものだけではなくて連合国であったイギリスやアメリカの飛行機、さらには敵側のドイツや日本の兵器も陳列されている（一部復元模型）うえ、道路を隔てて戦後兵器の展示場まで併設されている。改めてロシアが軍事大国であることを思い知ることだろう。モスクワを訪れた際は、半日ぐらいの予定を組んで戦争を肌身で感じるのもよい経験かも知れない。（札幌大学地域共創学群教授）

場所はПлощадь Победы (<https://goo.gl/maps/hkqspCrY4A52>) 月曜休館。入場料は大人300ルーブリ



● 広報部宛、ご投稿、ご意見をお待ちしております